

氏名（本籍）	羽成 恭子
学位の種類	博士（医学）
学位記番号	博甲第 9949 号
学位授与年月	令和 3 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	アドバンスケアプランニングをより効果的に実践するための実証研究 — 全ての人ひとりひとりの希望にそった人生の最終段階における医療・ケア提供のために—

主査	筑波大学教授	博士（医学）	前野 哲博
副査	筑波大学教授	博士（医学）	佐藤 晋爾
副査	筑波大学准教授	博士（保健学）	橋爪 祐美
副査	筑波大学助教	博士（医学）	福重 瑞穂

## 論文の内容の要旨

羽成恭子氏の博士学位論文は、アドバンスケアプランニングをより効果的に実践するための実証研究を実施したものである。その要旨は以下のとおりである。

### 【目的】

高齢多死社会の昨今、個人ひとりひとりが自身の将来の医療について考え、家族や医療介護提供者と話し合いを通して、個人の意向を理解し共有していくプロセスであるアドバンスケアプランニング（Advance care planning：ACP）の重要性が認識されてきた。著者は、医療介護提供者が個人のどのような要因に関心をもち、どのような情報提供をしながら ACP の話し合いを促進していくことが効果的であるのかを明らかにすることを目的とした研究を実施している。

### 【対象と方法】

【研究 1】においては、厚生労働省が実施した「人生の最終段階における医療に関する意識調査」で収集されたデータを用いた横断研究を行っている。著者は、ACP における話し合いを行うことを目的変数として、多変量ロジスティック回帰分析を行い、過去の介護経験やその他の要因との関連を探索した。

【研究 2】においては、著者は、地方都市で開催された市民公開講座の参加者 141 名を対象として実施したアンケート調査のデータを用いている。著者は、最期をむかえる場所として自宅を選択することを目的変数とし、地域のがん医療に対する安心感尺度を用い、地域の医療に対する安心感との関連を多変量ロジスティック回帰分析にて探索した。【研究 3】においては、著者は【研究 1】と同様のデータを用い、希望する人生の最終段階の療養場所（医療機関、介護施設、自宅）を目的変数として、想定される疾患（がん、慢性心疾患、認知症）によって希望する場所が異なるかを探索した。

### 【結果】

【研究 1】において、著者は、人生の最終段階に関する話し合いを行うことは、介護経験があることとの関連を示した(odds ratio [OR] 1.88, 95% confidence interval [95% CI] 1.35-2.64)。また、著者は、

話し合いを行っていないことと関連する要因として、男性、年齢が若いこと、かかりつけ医がないことを示した。【研究 2】においては、著者は、対象者の年齢・性別・医療介護提供者かどうか、および定期的な通院の有無を調整した多変量分析を行い、がん医療に対する安心感尺度が平均点以上であると、最期をむかえる場所として自宅を選択する可能性を示した(OR 3.08, 95% CI 1.04-9.16)。【研究 3】においては、著者は、想定される疾患ががんの場合は自宅(49.6%)、慢性心疾患の場合は医療機関(50.6%)、認知症の場合は介護施設(54.5%)がそれぞれ最多で選択され、希望する人生の最終段階の療養場所は、想定される疾患によって異なることを示した。また、著者は、想定される疾患と希望する療養場所の関係は年齢によって異なることを示した。

#### 【考察】

著者は、医療介護提供者が ACP における話し合いを開始する時に、先行研究で示されてきた個人の話し合い実施に関連する要因や介護経験の有無の把握をすることで、個人の話し合いに対する準備の程度を想定できることを示した。そして、今まさに介護を通して自身の将来の人生の最終段階にむけて考え、話し合いを実施する可能性がある介護者へは、医療介護提供者が積極的に関わり、より質の高い話し合いを提供できる可能性があることを明らかにした。

また著者は、医療介護提供者が人生の最終段階の療養場所や最期の場所を話し合う際、典型的な異なる疾患軌跡をたどる複数の疾患を想定したり、地域の医療の実状を情報提供し安心感を高めたりして、個人の希望をより正確に聞き出すことが重要であることを示した。また、著者は、地域における患者の急変時対応の充実や、家族介護者の負担を減らすようなサービスや介護施設の充実をはかり、安心して療養できる地域づくりが望まれることを示した。そして著者は、ACP の必要性や重要性を若い人達や男性にも伝わる方法を模索しつつ普及し、ACP を担うかかりつけ医をもつことを促し、かかりつけ医の ACP に関する研修の充実・普及を進める取り組みが必要であると論じている。

#### 【結論】

著者は、ACP をさらに促進するためには、医療介護提供者は介護経験を含む個人の話し合いを行うことに関連する要因に関心を持ち、把握し、個人の話し合いにむけた準備状態を認識した上で、地域の医療に関する安心感を高めるような具体的な情報提供や、具体的な疾患の想定を示し、個人の人生の価値や目標に則した医療に関する話し合いを行い、繰り返していくことが効果的であることを示した。そして著者は、医療介護提供者は、介護者の ACP に関する話し合いを行う絶好の機会を逃すことのないように、また、ACP を広く社会に普及させ、ACP を担う人材の育成を促進していく必要があると結論づけている。

## 審査の結果の要旨

#### (批評)

ACP の促進は、今後、少子高齢化が進む医療において極めて重要である。著者は、医療介護提供者の関わりによって介入可能な要因や予測因子を探求する 3 つの研究を通して、医療介護提供者が ACP について日常診療の中で担うべき役割や、効果的に促進するための要因について、エビデンスに基づく貴重な知見を提供している。特に、介護者への働きかけや、かかりつけ医の役割、想定される疾患による違いを明らかにした意義は大きい。

令和 2 年 12 月 23 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士(医学)の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。